

仙台

文学館

ニュース

第五十一号

Sendai
Literature
Museum
News

エッセイ

あかまつの道を抜けて

第13回 ―「熊出没に思う」

佐伯一麦

昨年に引き続き、東北ではクマ出没のニュースが相次いでいる。私が住む大年寺山でも、五月二十八日の早朝に、東北工大の長町キャンパス内でクマが目撃され、大学が臨時休校となった。

そして、地下鉄の台原駅から仙台文学館へと歩いて向かう台原森林公園でも五月二十日にクマの目撃情報があったため、当面の間、公園灯のない道はほぼ通行禁止となり、「あかまつの道」も通ることができなくなった。

報道では、東北六県のクマ出没情報はこの春だけで三〇〇〇件近くに達し、去年の同じ時期の二倍以上に増加しているという。

クマは二本足で立ち、円みを帯びた外見からか、ぬいぐるみなどになり、文学作品の中でも親しい存在として登場してきた。児童文学では、A・A・ミルンの「くまのプーさん」、マイケル・ボンズの「くまのパディントン」などが思い浮かぶ。映画で観たパディントンは、故郷のペルーで大地震が起きてロンドンのブラウン家で暮らすことになるという、移民を想わせる存在だった。純文学でも、思い当たるところでは川上弘美の

「神様」は、「わたし」がくまにさそわれてハイキングに出かけ、楽しい一日を過ごしたあと、抱擁を交わして、くまの神様の恵みを感じる話だった。

いっぽうで、『古事記』には、紀伊半島を南下して熊野から大和へ入ろうとしたカムヤマトイワレビコ(のちの神武天皇)の一行の前に大きな熊が現れ、その毒気に当てられて皆が意識朦朧となった、という記述がある。また、明治時代に柳田國男が著した『遠野物語』では、熊という名前の男が、雪の日に友人と狩りに行つて熊と遭遇し、抱え付けて格闘した後、傷を負いながらも討ち取った、という話が伝えられている。そんな愛らしさと恐ろしさとの二面性を持つているクマだが、リアルなクマと人との付き合い方が変わってきたことは否めない。

さて、当館は大規模改修に伴い、しばらくの休館となる。再開の折には、クマ騒動も落ち着いて、ふたたび「あかまつの道」を歩いて出向けることを願っている。

(さえき かずみ 作家・仙台文学館館長)

※「あかまつの道」は、台原森林公園と仙台文学館をつなぐ散策路です。

CONTENTS

エッセイ

「あかまつの道を抜けて」 佐伯一麦 ……1

シリーズ

「私の一冊」 渡辺優 ……2

特集

「佐伯一麦 北根ダイアログ2026」(抄録) ……4

大規模改修工事にともなう長期休館のお知らせ ……7

文学館日誌 ……8



写真:佐々木隆二

シリーズ「私の一冊」第45回

渡辺 優

高見広春

『バトル・ロワイアル』

二〇〇〇年十二月。日本とある映画が公開になりました。中学生同士の殺し合いを題材としたデスゲーム作品、深作欣二監督の『バトル・ロワイアル』。通称『バトルロワ』です。過激なテーマとその暴力性が問題視され、R15での公開となったこの映画。しかしそのスリリングな設定と、テーマ曲として採用されたヴェルディ『怒りの日』が流れるキャッチーなCMなどが話題を呼び、興行収入三十億円以上の大ヒットを記録しました。

血に飢えた中学生が無視できる存在ではありません。そこで私は本屋さんに走りまわりました。映画を観てもらえないなら、原作小説を読めばいい。当時書店には、映画の原作である高見広春氏の同名小説、一九九九年刊行の『バトル・ロワイアル』も、山のように平積みされていたのです。

そうして手にしたバトルロワを、私は一週間も経たずに読み切りました。面白過ぎる。ぐいぐい読ませくる軽快でリズムカルかつエッジの効いた文章。一クラス四十二人という登場人物の数にも関わらず、各々の魅力が十分に浮き立った個性的なキャラクター。最初から最後まで続く息をつかせぬ展開など、面白いポイントを上げればきりがありません。

高見広春『バトル・ロワイアル』(1999年 太田出版)

それにより、読者は否が応でも「自分だったらどう行動するだろう」という想像をかき立てられることとなります。バトルロワを読んだ中高生たちが皆妄想したであろう例に漏れず、私も「うちのクラスだったらどうなるだろう……」と考えて授業時間をつぶす日々を過ごしました。

二〇〇〇年、私は十三歳でした。課せられた年齢制限により、映画を観ることは叶いません。しかし、観たい。中学生同士が殺し合いをすることになる映画なんて、中学生が一番観たいに決まっています。

太田出版から発売されたバトルロワの単行本は、上下二段組の六六六ページというかなりの長さで、その厚みはさながらブロックのようでした。黒い表紙にはどこか攻撃的なレタリングで書かれた『BATTLE ROYALE』の文字が浮き上がり、自分かふだん手にしている明るく大衆向けの装丁の本とは、どこか一線を画す雰囲気を感じていました。

たが、私は未だにバトルロワを超えるデスゲーム作品に出会ったことがありません。

しかし、これは私が中学生時代という一番デスゲームを求めていた時期に、バトルロワに出会えたためかもしれせん。

前述の通り、バトルロワの魅力は綿密かつ刺激的なゲームシステムはもちろんのこと、そこに巻き込まれた少年少女の人間ドラマにあります。時代の変化と共にゲームシステムは先鋭化され、よりスリリングでより斬新なゲームは多数考案されてきたように思いますが、やはりその極限状態の人間を描き出す視点や筆致については、『バトル・ロワイアル』を超えるものはまだ現れていないように思っています。

かつての私がバトルロワにはまったように、時代ごとに時の中学生を魅了してやまないデスゲームが存在し、個々人の青春をデスで彩ってきたというのが実際のところであるのかも。かつて「中二病」であった私は今や「懐古厨」となり、「やつぱりデスゲームはバトルロワが原点にして至高」と、その輝きをいつまでも反芻しつづけております。



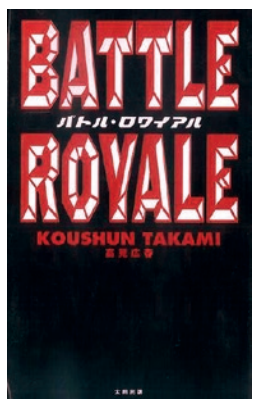
版画：明才



渡辺 優
わたなべ ゆう

撮影：上澤友香

作家。1987年、宮城県仙台市出身。宮城学院女子大学卒業。2015年、『ラメルノエリキサ』で第28回小説すばる新人賞を受賞。2025年、『女王様の電話番』が第174回直木賞候補となる。ほかの著作に『自由なサメと人間たちの夢』『アイドル 地下にうごめく星』『クラゲ・アイランドの夜明け』『アヤとあや』『カラスは言った』『私雨邸の殺人に関する各人の視点』『月蝕島の信者たち』など。現在、『河北新報』夕刊でエッセイ「問わず語りの記」を連載中。



佐伯一麦 北根ダイアローグ二〇二六

〜木村紅美さんを迎えて〜（抄録）

当館館長の佐伯一麦が、各分野で活躍している方を迎えてお話を伺うシリーズ企画「北根ダイアローグ」。今年度のゲストは、小学六年生から高校卒業までを仙台で過ごした木村紅美さん。作家同士の熱のこもったトークを抜粋してお届けします。

◆仙台短編文学賞の選考

佐伯一麦（以下、佐伯） 木村さんは仙台文学館には何回かいらっしゃっている？

木村紅美（以下、木村） そうですね。今回の仙台短編文学賞の選考委員のお話をいただいてから、イベントや

授賞式で何度か来ていて、ほととずる居場所になっています。

佐伯 仙台短編文学賞を選考してみて、いかがでしたか。

木村 選考委員の立場になったことが初めてで、ドキドキしました。最終候補作のどれも個性が違って面白く、その中で自分としては一番いい



木村紅美 きむら くみ

1976年、兵庫県生まれ。作家。2006年『風化する女』で文学界新人賞、2022年『あなたに安全な人』でBunkamuraドゥマゴ文学賞、2025年『熊はどこにいるの』で谷崎潤一郎賞を受賞。2026年、第9回仙台短編文学賞の選考委員を務めた。盛岡市在住。



佐伯一麦 さえき かずみ

1959年、仙台市生まれ。作家・仙台文学館館長。著書に『鉄塔家族』（大佛次郎賞）、『ノルゲ』（野間文芸賞）、『還れぬ家』（毎日芸術賞）、『渡良瀬』（伊藤整文学賞）、『山海記』（芸術選奨文部科学大臣賞）、『ミチノオク』、『水平と垂直』など多数。

と思ったものを大賞に推しました。とても貴重な経験をしたと思っています。

◆仙台で過ごした頃のひと

佐伯 仙台で過ごした時期の思い出をお伺いしたいのですが。

木村 千葉県から仙台的の小学校に転入し、初日から凄まじいじめを受けました。

佐伯 いじめに遭ったことでのある種の疎外感や孤独感は、木村さんの書かれているものに反映されていると思います。文学には、マイナスのカードを集めていって、最後プラスに転じるようなところがある。ただ、そのときの当事者としては苦しかったでしょう。中学に入ってからはずは？

木村 中学校はいろんな小学校から

◆震災後の執筆について

佐伯 その後、二〇一一年に東日本大震災があつて、その後ちよつと書きにくかつた。

木村 はい。丸一年もの間、何を書いても全部ボツになったことがあつて。心配してくれた別の編集者にその原稿を送ったら、「一行目から日本語が死んでいますね」と言われました。文章から気力が消えていたんでしようね。東北に縁の深い作家としていろんな逡巡があつて、何も書けなくなつてしまつた時期でした。佐伯さんはその時期は『還れぬ家』を書いていらつしやつた？

佐伯 そうですね。『新潮』で連載していて、三分の二ぐらいまで原稿が進んだところで震災が起こつた。二ヶ月休載した後、断差が生まれることを恐れずに、震災以降に時間軸を動かして書き継ぎました。僕の場合、大鉦をふるつてなんとか書き切つたけれども、新しい小説を発想するのは大変だつたと思います。

木村 『渡良瀬』の改稿もしてらつしやつたんですね。大好きな長編です。

佐伯 『渡良瀬』は、一九九六年まで『海燕』に連載して、雑誌がな

子どもたちが来ていたので、薄まつて、いじめは少し収まりましたね。

佐伯 高校は向山高校と聞きました。

木村 そうです。高校では文芸愛好会に入り、部室が居場所になって。高校はずいぶん楽しく、仙台のイメージも良い方へ変わつていきました。

佐伯 図書室も充実していたとか。

木村 はい。向山高校の当時の図書館司書さんが、私が入れたいと言つた本は全部入れてくれて、非常に助かつていました。

佐伯 当時どういふ本を読んでいた？

木村 中学生の頃は新井素子さんが好きで、新井さんが好きな作家としてあげていた星新一、北杜夫、レイ・ブラッドベリなどを読むようになりました。あとは「たま」というバンドの影響で、澁澤龍彦、稲垣足穂、萩原朔太郎に夢中になり。高校に入ると谷崎潤一郎、三島由紀夫、司書さんに教わつた森茉莉。同時に山田詠美さん、吉本ばなさん、長野まゆみさんなどは、図書室に入れてもらつて読む。純文学系もエンタメ系もまぜこぜで読みました。

佐伯 作家を志したきっかけは何がありましたか。

くなつたので中絶して、未完でもいいと思つていたんですけど、震災を経て、やはり完成させなければという思いに駆られて書き継いで、二〇一三年に刊行しました。

木村 『渡良瀬』を震災の後に読んだら、足尾銅山鉱毒事件を福島原発事故と重ねてしまう。自分にとっては、日本つて一体何をしてるんだろつと小説の力で深く考えさせられる作品でした。震災後に改稿されて良かつたと思います。

◆『雪子さんの足音』

佐伯 『雪子さんの足音』（初出二〇一七年『群像』）は、一見、矢部太郎さんの漫画『大家さんと僕』みたいな話ですが、よくよく読むと怖いんですね。人間の優しさとか愛情が、かえつて人を追い詰めていくという。

木村 東京の大学に進んで、父方の祖母のところによく遊びに行つたんですけど、お小遣いをもらうことが多くて。別にもらいたいわけじゃないのに、だんだんお小遣いを求め始めて、でもその割に全然おばあちゃん孝行ができなかつたという後悔もあり、思い浮かんだ小説です。あと、二十代のときに憧れた尾崎翠の『第

仙台文学館は 大規模改修工事にもない 長期休館します

期間:2026年8月24日～2028年4月末(予定)

※工事の進捗状況等により、休館期間が変更となる場合があります。

Q どうして改修するの？

A 開館から約30年、経年劣化による不具合が目立つように

仙台文学館は、1999（平成 11）年に開館してから 30 年近くが経ちました。その間、建物や設備の老朽化にともない、雨漏りや空調の不具合などがたびたび発生しており、それらの改修が喫緊の課題となっています。

皆様に安心してご利用いただき、また貴重な文学資料を末永く保存していくために、将来を見据えて、開館以来初めての大規模な工事を行います。

Q 改修中は何をしているの？

A 館外での講座や巡回展示を行います

休館中も、一部の講座やイベントは、近隣の日立システムズホール仙台（青年文化センター）に会場を移して行います。また、せんだい 3.11 メモリアル交流館や、市内の図書館と連携した巡回展示も開催予定。それぞれの情報は、当館のウェブサイトや SNS (X) 等で発信しますので、ぜひチェックしてみてください。改修工事の進捗や、施設の再開に向けた情報も、SNS 等で随時発信していきます。（X アカウント：@sendailit）

Q どんな工事が行われるの？

A 古い設備を更新し、施設を長く使えるようにします

トイレの洋式化、館内照明の全 LED 化、空調機器やエレベーター、自動ドアの更新など、改修項目は多岐にわたります。いずれも、古くなった設備を新しくし、施設を長く安全に使い続けるための工事です。

休館中は安全確保のため、一般の方は敷地内に立ち入ることができません。また台原森林公園への通り抜けもできません。ご不便をおかけしますが、ご理解・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

より快適な文学館を目指して

今回の改修工事では、建物の見た目はそのままに、設備をアップデートし、より快適に長くご利用いただける施設とすることを目指しています。また、さらに多くの方々に文学の世界に親しんでいただけるよう、常設展示室の内容のリニューアルを検討しています。台原森林公園の豊かな自然に囲まれた場所で、より開かれた、魅力ある文学館として再開館できるよう、環境づくりに取り組んでまいります。



七官界彷徨』を読み返し、下宿の話が書きたいと思って、設定ができあがりました。

佐伯 この作品はちゃんと日本語が生きていて、復活できた感じがします。『群像』に一挙掲載で、久々に文芸誌で木村さんの作品が読めて嬉しかったですね。

◆『あなたに安全な人』

佐伯 二〇二一年に本になった『あなたに安全な人』は、今せんだいメディアテークの館長をなさっているロバートキャンベルさんが選考委員を務めたドウマゴ文学賞を受賞しました。

木村 キャンベルさんは、この本を本屋さんで見て、タイトルが気に入って読んだそうです。当時、キャンベルさんとは面識がなく、何もつながりがない状態で選んでくださったことに感激しました。

佐伯 この作品はコロナ禍が背景にある。岩手は最後まで感染者が出なかった県で、舞台の特定はしてはいないけれど、なんとなく岩手県の町という意識はあるわけですね。

木村 そうです。二〇二〇年四月に、東京から岩手に移住した人が隔離された仮住まいで焼死してしまうという事件があり、その時私は東京に住んでいたんですけど、すごくショックで。それで何かを書きたいと思ったのがきっかけでした。コロナ禍の異様な空気もあの小説のモチーフになっています。

佐伯 その雰囲気は本当に出ています。木村さんはこの執筆中に盛岡

に引越して、そこで本腰を入れて書いた最初の小説ということになりますね。作中には『遠野物語』の一節が出てきたり、最後は即身仏を思わせるイメージがあったりとか、かなり東北的な要素が入ってきている。盛岡に移って、描き方は変わってきたんじやないですか。

木村 そうですね。住み始めて五年半経ったんですけど、先日佐伯さんの『ミチノオク』を読んで、東北の一つずつの町に埋もれた歴史があると思われ、そこから得るインスピレーションでまだまだたくさん書けるんじゃないかと実感しました。

◆『熊はぐいぐい』

佐伯 昨年、木村さんは『熊はどこにいろの』で谷崎潤一郎賞を取られました。谷崎賞は、中堅の作家に与えられる大事な賞で、大変な快挙。

僕もその報に接した時に快哉を叫ぶ思いになりました。この作品は四人の登場人物の視点で描かれていく。『月食の日』以来の視点移動にこだわって書いてきたところの、一つの完成形ではないかと思えます。長編小説というのは、どこかで一回行き詰まるものなんですけど、この作品もラストで苦勞したとか。

木村 最初書き上げたときはハッピーエンドでした。ただ、編集者に送ってしばらく経って読み返したら違和感があって、その後、編集者からもラストが幸せな感じで終わるのは良くないんじゃないかと言われ、最初から大幅に見直して全体を書き直すことにしました。本当は二ヶ月

くらい余裕が欲しかったのですが、十日間で一気に直すことになり、ラストはがらりと変わりました。

佐伯 このラストは良かった。作品のタイトルは決まっていた？

木村 タイトルも本当に決まらなくて。校了前のギリギリで思い浮かびました。二年前に考えたタイトルなので、盛岡でも仙台でもそこらじゅうに熊が出ている今では多分つけられないですね。

佐伯 追い込まれると、そこで思いもよらない何か、前半で聞いたような読書体験や人生的な経験とか、身体に宿っている無意識のようなものがなぜか出てくる。そういう深みのある表現が、この『熊はどこにいろの』の中にはたくさんあって、谷崎賞にふさわしい傑作だと思えます。今日は楽しく話すことができて良かったです。ありがとうございました。

木村 ありがとうございます。

（2026年5月24日開催）

2026年3月～7月



①朗読とチェロの生演奏に続き、佐々木隆二さんによる写真とトークで『風の又三郎』の世界を味わいました。



②夫・三浦永年さんによる、ティニさんの思い出や仕事にまつわるエピソードが満載のトークイベントとなりました。



③当館敷地内にも一時、立ち入り制限の表示を設置しました。



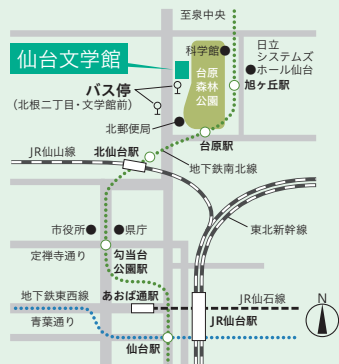
④今年の「こども文学館えほんのひろば」は、仙台ゆかりの作家・なかがわちひろさんの展覧会をメインに、イベントやお話をなどを実施。

- 6月 30日 外看板と館内のバナーを、こども文学館えほんのひろば「なかがわちひろ展 こどもの本の森へ」に掛け替え。〈写真④〉
- 7月 18日 こども文学館えほんのひろば「なかがわちひろ展 こどもの本の森へ」オープン(8月23日まで)。オープンに合わせ、なかがわちひろ講演会「こどもの本の幸せ 私の本たちの舞台裏」を開催。

〈お知らせ〉

当館は2026年8月24日(月)から2028年4月末(予定)まで、建物の大規模改修工事のため全館休館となります。休館中は安全確保のために、敷地内に立ち入ることができません。なお、工事の進捗状況等により、休館期間が変更となる場合があります。ご理解・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

- 3月 1日 写真展「しゃんしごと人・佐々木隆二の世界」関連イベントとして、「朗読と音楽とスライド『風の又三郎』の世界」を開催。朗読 菊池佳南氏、音楽(チェロ) 山本純氏、トーク 佐々木隆二氏。〈写真①〉
- 22日 写真展「しゃんしごと人・佐々木隆二の世界」会期終了。
- 24日 外看板と館内のバナーを特別展「美しい本 製本装幀家ティニ・ミウラのしごと」に掛け替え。
- 4月 11日 当館講習室を会場に、「第9回仙台台短編文学賞」の授賞式が開催された。
- 25日 特別展「美しい本 製本装幀家ティニ・ミウラのしごと」オープン。オープンに合わせ、トークイベント「ティニ・ミウラの製本装幀芸術の世界」を開催。出演 三浦永年氏(マープル・ペーパー制作者、蒐集家)、三上満良氏(元宮城県美術館副館長)。〈写真②〉
- 5月 6日 仙台文学館友の会総会を開催。同日、友の会会員限定の特別展展示解説を実施。
- 16日 特別展関連イベントとして、「手製本ワークショップ」を開催。講師はmari氏(手製本作家)。
- 17日 特別展展示解説を実施(5月27日、6月20日にも実施)。
- 20日 隣接する台原森林公園でクマの目撃情報があり、散策路の通行が制限される。〈写真③〉
- 24日 「佐伯一麦 北根ダイアログ2026 一木村紅美さんを迎えて」を開催(本紙4～6ページ参照)。
- 30日 特別展関連イベントとして、トークショー「夫・三浦永年が語る製本装幀家ティニ・ミウラ」を開催。
- 6月 28日 第29回「ことばの祭典—短歌・俳句・川柳へのいざない—」開催。選者は短歌部門 三井修、梶原さい子、俳句部門 阪西敦子、高野ムツオ、川柳部門 月波与生、雫石隆子の各氏。
- 28日 特別展「美しい本 製本装幀家ティニ・ミウラのしごと」会期終了。



交通のごあんない

■バス利用の場合

〈宮城交通バス〉

- 仙台駅西口バスプール2・3・4・6番乗り場 仙台北・泉地区方面行(北山トンネル経由を除く)

〈市営バス〉

- 仙台駅西口バスプール6番乗り場 八乙女駅行
- ※いずれも「北根二丁目・文学館前」下車

■地下鉄利用の場合

- 地下鉄南北線「台原駅」下車、南1番出口より徒歩約25分(台原森林公園内あかまつの道経由)
- ※山道です。雨天時は道が滑りやすくなりますので、ご注意ください。

■駐車場40台(無料)

- 台数に限りがございます。なるべく公共交通機関をご利用ください。



カフェ ひざしの杜(8/23日)まで営業

お食事、デザート、各種飲み物などをご用意しています。お得なランチメニューもあります♪

〔営業時間〕
10:00～16:00(フードラストオーダー15:30)
※ランチは10:00～14:00
TEL 022-219-1341

